人文科教育研究　21　1994年　pp.R1－11

榊原芳野伝覚書き
――明治初期国語教科書編纂者の研究――

高木　まさき

一、はじめに

明治初期の国語教育に多大の影響力を持った文部省編纂教科書あるいは『小学教則』（明治五年）に例示された教科書の編纂者たちについては、二、三の例外を除いて、その履歴など十分な調査もなされないままに今日に至っている。しかしそれら編纂者たちの履歴、教養、著作等の業績を知ることは、単に研究史の空白を埋めるという以上に、当時の国語教育の質を考える上でたいへん重要な意味をもつと考えられる。本研究では『小学読本』（明治六年　田中義廉編『小学読本』とは別種）の編者として知られる榊原芳野について調査を行ったが、例えば、そこから浮かび上がった以下のような事実は、そうした点から注目されてよいものと思われる。

芳野は国学者・伊能穎則（ひでのり）を師とするが、その同門には、明治初期の教科書編纂に関わった著名な人物たち、すなわち『単語篇』とともに『小学教則』に例示された『童蒙必読』（橋爪貫一著）の校閲者・横山由清、文部省編の歴史教科書『史略』の直接の著者・木村正辞、文部省編『語彙』『古事類苑』などの編纂に芳野とともに関わった小中村清矩らがおり、また明治八年に創刊され、芳野もその有力なメンバーであった雑誌『洋々社談』に集った人々、すなわち西村茂樹、大槻磐渓、黒川眞頼、那珂通高、依田学海、木村正辞、伊藤圭介、小中村清矩、大槻文彦、那珂通世らは、文部省に籍を置くか深い関わりをもった人物たちで、教科書その他を編纂している。さらに右のうち博物学者として著名な伊藤圭介は、田中義廉が、植物学者として知られる兄芳男とともに蘭学の手ほどきを受けた人物である。いずれをとっても当時を代表する著名な知識人であるが、資料に乏しく、派手な交際を持たなかったらしい芳野の伝記を調べただけで、こうした人物たちとの深いつながりが即座に浮かび上がってくることは、明治初期の文部省を中心として形成された官製の言語文化が、かなり高レベルの知識人たちによってなされた事と同時に、思いのほか狭い範囲の人的交流の中で形成されていた事がうかがえる。もちろん芳野自身も、任を果たさずして世を去ったが、『古事類苑』や『言海』の編纂を委嘱される等、またその著作等からも当時一流の知識人であったことが検証できる。さらに、芳野編の『小学読本』および『小学綴字翼』は、ともに巻頭に文部省編の『単語篇』と類似した意味分類による単語集を備えており、あるいは『単語篇』の直接の編者が芳野であったのではないかとの推測もできる。

ところで、榊原芳野の伝記研究は、芳野と文部省で机を並べた依

田学海による「那珂通高榊原芳野合伝」（『譚海』巻四　鳳文館　明治十七年）、また芳野とともに文部省に籍を置いた大槻如電・文彦兄弟の書留等を基礎資料とした玉林晴朗の「榊原芳野の話」（『伝記』四―四　昭和十二年　上記は「国学者榊原芳野の話」として『伝記聚芳』日本青年教育会出版部　昭和十七年三月五日　に収録。以下はこれによる。）、大槻如電による芳野の墓碑銘を伝える玉林晴朗の「榊原芳野と其の墓」（『掃苔』第六巻第八号　東京名墓顕彰会　昭和十二年八月十五日）などに詳しく、またそれらに補訂を加えた桑原伸介「榊原芳野のこと」（『図書館と出版文化―弥吉光長先生喜寿記念論文集』弥吉光長先生喜寿記念会　昭和五十二年九月九日）などがある。本研究では、それらを多く出る事はできないが、芳野が明治三年に本所石原町に開いた攻玉塾の『家塾明細表』（明治六年第四節参照。）その他を、前記の資料に新たに加えて、これらを年代順に整理し直し、また国立国会図書館所蔵図書を中心に芳野の編・著書または校閲したものをまとめ、著作年表（第三節参照）を作成した。

なお、本研究では紙数その他の都合で、資料の解説、引用等が十分に果たしえなかった点がある。タイトルを覚書きとした所以である。不十分であった点については、別に機会を得て整理しなおす予定である。

二、年譜

＊引用文献については、その文献のみが伝えている事柄や解釈、また原文をそのまま引用した場合など、特に必要と判断された場合に記した。

天保三年（一八三二）一歳

江戸日本橋住吉町に生まれる。通称鬲蔵（れきぞう）、字は作良。号は琴洲・桂園。父正之助、母みちの第一子。祖父新兵衛は小船町で有名な大店、鰹節問屋遠州屋本家の主人。先祖は浜松から江戸に出る。祖父新兵衛は芳野の父正之助が四五歳の幼児の時に没したため、養子を迎え二代目新兵衛とした。芳野の義理の叔父である。だが、この二代目の時に家は没落し、分家の尼屋伝次郎の家のみが明治まで続き、榊原を名乗る。玉林晴朗は「芳野の母は坂内氏の女、名をみちと云ひ閑斉の妹であつた。」（「国学者榊原芳野の話」）とするが、閑斉なる人物は不明。

天保八年（一八三七）六歳

『家塾明細表』に「天保八九年　父正之助ヨリ教授相受。」とある。依田学海は「芳野の父を搗謙という。俳歌を善くす。母某氏も書を読み国雅を善くす。芳野に教ゆること甚だ厳なり。芳野訓を奉じて刻苦甚最、業成り其の得る所を以て徒に授く。」（「那珂梧樓榊原芳野合伝」ただし原文は漢文で、ここでは桑原伸介の「榊原芳野のこと」に示された書き下し文によった。以下同様。）と言い、芳野が幼少の頃から親の厳しい教育を受けたことが分かる。これは玉林晴朗によれば「遠州家の没落に遭ひ、生活の道が絶えたので、正之助

夫妻は芸が身を助けた訳か、其の好きな道の俳諧和歌を教へ、或は又絵画を売る事に依って其の糧とした。然しながら左様な事から得る収入は知れたもの雲錦堂夫妻（雲錦堂は芳野の父の号　高木注）の生活は相当苦るしく、自分達の力に依つて貧乏を克服する事の不可能を知つた二人は唯一の希望を子供の芳野に懸けた。」（「国学者榊原芳野の話」）からと言う。

天保十年（一八三九）八歳

「同十年己亥、旧津山医員井岡友仙ニ入学」（『家塾明細表』）。井岡友仙なる人物は不明。

天保十四年（一八四三）十二歳

「同十四年癸卯、旧宇都宮藩士大橋順蔵ニ従学仕、其他神典并ニ物産学及葉学梵学等兼学仕。更ニ旧幕府儒員芳野無育ニ従学。」（『家塾明細表』）　大橋順蔵、芳野無育は不明。この時期までに、父母から国文の手ほどきを受けたのをはじめ、医学、国学、物産学、梵学、儒学等、後年、博識をもって知られる芳野の基礎が築かれていたものと思われる。

嘉永元年（一八四八）十七歳

佐原から出て深川あるいは本所に家塾を開いていた伊能頴則（ひでのり）（平田篤胤門下、号蒿村）に入門。国典、古代制度、和歌を学ぶ。同門に小中村清矩、横山由清、木村正辞（まさこと）らがいる。芳野の今後の活躍を考えたとき、これらの人々との出会いが、大きな意味をもってくる。伊能頴則は平田篤胤の門下で、家業の呉服商を捨てて香取神宮神職となり、のち神祇官宣教使となった人物。小中村清矩は伊能頴則に学んだ後、紀伊家古学館頭取となり、幕府和学講談所で講義をし、維新後は太政官、大学、神祇官、教部省、文部省などに籍を置き、明治十五年には東京大学教授、東京学士院会員になる。著書も多数あるが、芳野との関係で言えば、ともに『語彙』（明治四年　文部省）、『古事類苑』（明治十二年　文部省）編纂に関わった事があげられる。横山由清はやはり幕府和学講談所教授を経て、維新後は大学、太政官、元老院などに籍を置き、著作としては『旧典類纂皇位継承篇』（明治十一年）等が良く知られているが、『小学教則』（明治五年九月）の単語読方（コトバノヨミカタ）に例示された『童蒙必読』（橋爪貫一著）の校閲をした人物である。木村正辞は『万葉集美夫君志』等で知られる明治期の著名な万葉研究者で、幕末には和学講談所会頭助役、維新後は大学、太政官、文部省などを経て文科大学教授となるが、教科書も幾つか編纂しており、那珂道高らと明治初年の歴史教科書として有名な『史略』（文部省　明治五年）を編纂、その他『日本略史』（東京師範学校　那珂道高校、明治八年）、『日本史要』（東京師範学校、那珂通高訂、明治十一年）、また榊原芳野編の『小学綴字書』（文部省　明治七年）の校訂を行っている。

芳野はその他、深川稲荷の別当で連歌師の行阿日賢に仏学を学んだとされるが、桑原伸介は「行阿らしき人を見出せない。行阿については一応不明という外はない。」（「榊原芳野のこと」）とする。また『慶長以来国学者史伝』によれば芳野はさらに深川潜蔵にも学んだとある。『名人忌辰録』によれば、深川潜蔵は名元儁（もとトし）「儒学又老仏に渉り物産国学又蘭学をも嗜め り、安政三辰年五月四日没す」とある。なお水本某に本草を学んだとも言われるが、詳細は不明であ

る（国立国会図書館編『国立国会図書館所蔵個人文庫展　その2―古典籍探究の軌跡―』展示目録）。

安政四年（一八五七）二十六歳

九月十六日、父正之助没する。その後、芳野は滝沢氏の女を妻に迎える。名は未詳。男子出生。（玉林晴朗「国学者榊原芳野の話」）

安政末（一八六〇）二十九歳

本所石原町に家塾を開く。

文久二年（一八六二）三十一歳

男子没。（玉林晴朗「国学者榊原芳野の話」）

文久年間（一八六一～六四）三十～三十三歳

「文久年間、昌平坂学校教授之幕命ヲ受候処、数旬之後退辞仕候。」（『家塾明細表』）

明治二年（一八六九）三十八歳

昌平学校少助教。（明治元年、旧昌平黌、漢学から国学中心に。昌平学校と改称。）

六月、昌平学校、開成学校、医学校統合、大学校となる。

七月二十七日、大学校少助教。六十七石。伊能頴則、木村正辞は大助教。小中村清矩、横山由清は中助教。

十二月、芳野も大学中助教となる。その教授ぶりを桑原伸介は「芳野の教官生活は一年であったが、その性格の通り熱心な教授振りであったようだ。『昌平遺響』はこの時期昌平学校に学んだ高橋勝弘の編著に成るが、中に榊原助教を評して『博覧強記和漢学及竺典に通じ書生の訓詁を受くるには最も良師なりとて就いて学ぶ者多かりし』といっている。」（「榊原芳野のこと」）とする。その後のことについては『家塾明細表』に「明治二年己巳正月、依朝命、大学校教授試補被仰付、累遷、権大助教編輯寮九等出仕博物局兼務ニ至リ、同壬申（明治五年　高木注）九月廃寮ニ依リ家居教授罷在候処、尤教授者来仕居候。」とある。

明治三年（一八七〇）三十九歳

三月、攻玉塾開塾。『家塾明細表』に「於当所（本所石原町八十一番地　高木注）私塾開業候義者、明治三年庚午三月ヨリ開塾候也。」とある。

七月十三日、大学内、漢学者と国学者の対立激化。大学閉鎖、学官皆罷。伊能頴則は神祇省・宣教使・権中博士（従七位守）、木村正辞は文部省編輯寮・権助（従七位守）、小中村清矩は神祇省・大録（従七位守）、横山由清は太政官・正院・権少外史（従七位守）。

明治四年（一八七一）四十歳

十一月、文部省、権大助教、編輯寮九等出仕。『語彙』（文部省明治四～十七年）『語彙活語指掌』『語彙別記』を小中村清矩、黒川眞頼らと編纂着手。

明治五年（一八七二）四十一歳

大槻如電（修二、二十八歳）、文部省に入り芳野と机を並べる。

玉林晴朗によれば、如電は芳野にたいへん世話になって尊敬するようになり、晩年までそれを忘れなかった（「国学者榊原芳野の話」）という。如電の弟文彦も文部省に入り、芳野と親しく交わる。

なお田中義廉もこの年、海軍少佐兼兵学少教授から文部省に入るが、それは文部卿大木喬任より大槻如電とともに漢字制限の依頼を受けての事と言われる。（古田東朔「田中義廉」）

『教草』（明治五～九年）中、「禍腐（こんにゃく）一覧」「豆腐一覧」執筆。

明治六年（一八七三）四十二歳

芳野、権大講義となる。「月俸五十円」（玉林晴朗「国学者榊原芳野の話」）

『小学読本』（文部省）刊。この頃、文部省の編書課長であった西村茂樹は、『往事録』でこの当時の事を次のように記している。

「明治六年十一月廿五日、文部省五等出仕に補せられ、編書課長を命ぜらる、文部省創立以来首として中学小学の課業書を編輯せざるべからざることと定めたれども、未た其方を得ず、又前文部卿大木喬任氏の時より、種々の書の編纂に着手し、頗る紛雑の観あり、余が編書課長となりたる時、課員の分担せる所は伊藤圭介、日本産物誌を編纂し、（略）田中義廉小学読本を編し、榊原芳野、稲荷千頴別種の読本を編し、（略）木村正辞、黒川眞頼は本邦歴史を編し、（略）南部義籌、仮字文典を編す、（略）亦教育用の西書を翻訳す、然るに此頃は洋書を読む者は多く和漢の書に通ぜず、是を以て訳成る毎に、必す漢文に通する者をして其文を修正せしむ、是を校正といふ、又前文部卿の時より百科全書の編あり、是は英人チヤムバー氏の原書を訳するものにして、其訳者は本省の官吏に限らず、広く世間の洋学者に托す、是又脱稿の上、本課にて是を校正して出版するなり、此校正者は皆編書課中にあり、那珂通高、大井潤一、清水世信、宮崎愚、内村耿之介、小林病翁、長川新吾のごとき是なり、」

なおこの芳野の手になる『小学読本』および明治八年刊『小学綴字翼』は、巻頭に『単語篇』（文部省　明治五年）に類似した構成の単語集を備えており、『単語篇』の編纂には芳野が中心的な役割を果たしていたのではないかと推測される。

十二月十五日、自宅出火により数千巻の書籍、草稿を蕩尽する。「東京日日新聞」はこれを次のように伝えている。「昨夜本所石原の火事は榊原芳野と云先生の宅なりし由、可惜数千巻の珍書、多年の草稿総て蕩尽せり」（明六・十二・十六）また依田学海は「俸銭の入る所挙げて以て書を購う。蔵する所数千巻、歳の甲戌災に遭う。片紙を存せず。再び蒐むること数年、七千余巻に至る。経史子集より以下雑録伝記謡曲俚詞、一として備わらざるはなし。」（「那珂梧楼榊原芳野合伝」）として、この火事の後、芳野が再び膨大な書籍を集めた事を記している。

明治七年（一八七四）四十三歳

『小学読本』（改正版、文部省）、『小学綴字書』（文部省）刊。

明治八年（一八七五）四十四歳

『小学綴字翼』、『太古史略』、『文芸概略』刊。

四月、『洋々社談』創刊（～十六年三月廃刊）。定価三銭五厘。

榊原芳野の論稿は明治十二年八月まで十二編。社友は、大槻磐渓（七十五歳）、榊原芳野（四十四歳）、西村茂樹（四十八歳）、黒川眞

頼（四十七歳）、那珂通高（四十八歳　）、依田学海（四十四歳）、木村正辞（四十九歳）、伊藤圭介（七十三歳）、小中村清矩（五十四歳）、阪谷素（五十四歳）、大槻文彦（二十九歳）、那珂通世（二十五歳）、他。最長老の大槻磐渓が『洋々社談』第一号に記した「洋々社記」には、社に集う人々の様子と雑誌刊行の経緯とを次のように記している。「其参社者何人、風流儒雅、博聞強記、有純於国学者、有専於漢学者、有主於洋学而兼国学与漢学者、各陳所見、同異相済、議論明快、発揮神理、以期至於渙然氷釈、其楽洋々之域而已矣、（略）鳥呼方今文明開化之秋、不耽宴楽、不事佚遊、特設此社、聚首討論、務採公論、旁蒐異聞、毎会一通、録曰社談、刷之活字（略）乙亥三月」社では芳野は那珂通高とともに博覧多識を称せらる。「朋友相会して談一の難義に及べば、必ず曰く、是れ那珂先生に非ざれば知る能わず、然らざれば榊原君なり。若し二君にして知らざれば、天下復た問うべきの人なし。其の人の信ずる所かくの如し。」（依田学海「那珂梧楼榊原芳野合伝」）なおこれら社友のうち、西村茂樹、阪谷素は福沢諭吉らの明六社の社友でもあった。またシーボルトに学び博物学者として著名な伊藤圭介は、田中義廉が、植物学者として知られる兄芳男とともに蘭学の手ほどきを受けた人物である。

一般には見過ごされがちだが、この年、大槻文彦とともに『日本辞書言海』（明治二十二～二十四年）の編纂を開始している。大槻文彦の有名な「ことばのうみのおくがき」（『言海』明治二十四年四月）には次のようにある。「八年二月二日、本省報告課（明治十三年に、編輯局と改められぬ。）に転勤し、ここにはじめて、日本辞書編輯の命あり。これぞ本書編輯着手のはじめなりける。時の課長は西村茂樹君なりき。その初は榊原芳野君とともに、編輯のおほせをかうむりたりしに、幾ほどなくて、榊原君はほかにうつりて、おのれひとりの業とはなりぬ。」「編輯中の質疑にいたりては、黒川眞頼、横山由清、小中村清矩、榊原芳野、佐藤誠実、等諸君の教、謝しおもふところなり。」また桑原伸介は大槻文彦の直話を次のように伝えている。「国学は師について学んだことがない」という大槻文彦が「日本最初の近代的な国語辞書『言海』の編者たり得たというのは、勿論博士その人の篤学によることはいうまでもなかろうが、文部省で机を並べた榊原芳野に益を享けたとは博士の直話である。芳野の没後はその後を黒川眞頼が引受けたようである。」（「榊原芳野のこと」）

五月二十五日、母没（玉林晴朗「国学者榊原芳野の話」）。

明治十年（一八七七）（四十六歳）

八月「文芸概略」『日本教育史略』文部省編所収。『日本教育史略』の序に「欧米各国皆教育ノ史有リテ我ガ邦ハ未コレ有ラズ。コレ有ルコト此ノ編ヨリ肇マル。此ノ編ノ成ル明治九年ニ在リ。即西暦一千八百七十六年ニシテ、米国ノ独立セシヨリ茲ニ一百年ナリ。国人乃将ニ大ニ博覧会ヲ費拉特費府（フィラデルフィア　高木注）ニ開カントス。書ヲ我ガ邦ニ致シテ其ノ場ニ陳ズベキ者ヲ求ム。文部省ノ職固教育ヲ司ルニ在リ。因リテ数子ヲシテ此ノ編ヲ選セシメテ以テ其ノ求ニ応ズ。編首ヲ教育概言トス米国ノ人大闢慕来（ダビッド・モルレー　高木注）氏ノ書セシ所ニシテ、小林儀秀コレヲ訳ス。（略）次ヲ教育志略トス。大槻修二ノ輯セシ所ニシテ、那珂通高コレヲ校ス。次ヲ文芸概略トス。榊原芳野ノ纂セシ所ニシテ、妻木頼

矩ハ文部省沿革略記ヲ著シテ以テ其後ニ附ス。」とある。

明治十一年（一八七八）四十七歳

『文芸類纂』八巻（文部省）刊。「文芸概略」（明治十年）を増補。玉林晴朗によれば「明治初年に於ける西洋文明の移入に対比して、我国固有文化の認識を深めんとしたものであ」り、「其の引証の詳確なのを以つて知られて居る。」また刊本の方は色彩がないが、原本の方は色彩が施されていると言う。（「国学者榊原芳野の話」）

明治十二年（一八七九）四十八歳

三月八日、文部大書記官西村茂樹の建議を文部大輔田中不二麿、同少輔神田孝平が採用、小中村清矩を主任とし、榊原芳野、那珂通世ら、『古事類苑』の編纂に着手する。西村茂樹がこれを統括する。その後「那珂通世氏ハ既ニ十二年五月ヲ以テ病没シ、榊原芳野氏モ亦翌年十二月病ノ為ニ依頼免官」となった。さらに、明治十九年、森有礼文部大臣の時に、小中村清矩が編纂委員長に、大槻文彦が編纂委員、翌年には黒川眞頼が編纂委員になるなど榊原芳野に近い人々が編纂に参画する。（「古事類苑編纂事歴」）

明治十三年（一八八〇）四十九歳

四月『染色史略』未刊行の写本。無窮会所蔵。巻末に「右一冊染工浅井勝太郎之所伝、芳野編選上諸文部省、副本一部蔵之、今松岡先生以作衣色考証之資、明治庚辰四月、榊原芳野」と記されている。（玉林晴朗「国学者榊原芳野の話」）

十二月、文部省一等属上等給。「月俸六十五円」（玉林晴朗「国学者榊原芳野の話」）「古事類苑編纂事歴」には「榊原芳野氏モ亦翌年（明治十三年　高木注）十二月病ノ為ニ依願免官トナレリ」とある。

明治十四年（一八八一）五十歳

一月、発狂して文部省を辞す。中根岸に幽居。（玉林晴朗「国学者榊原芳野の話」）この時の様子を依田学海は次のように記す。「芳野梧樓に後るること五年、忽に狂を発し居動常なし。然れども人と古典を談ずれば旁引博証一として差訛なし。施して人事に及べば則ち癲狂故の如し。居ること歳余にして没す。嗣なし。」（「那珂梧樓榊原芳野合伝」）

十二月二日病没。享年五十歳。法名、大観作良居士。東京今戸の曹洞宗安昌寺に埋葬される。芳野の妻はこの時既に家にはいなかった。没したものか家を去ったのか不明。姪貞子を継嗣とする。『洋々社談』第四号に「与外姪貞子書」がある。

大槻如電、文彦兄弟に後事を託す。明治二十年に大槻如電撰「榊原芳野君墓銘」ができ、明治四十年頃に畳一畳位の巨石に彫ったものが完成していたが、費用が集まらず、安昌寺本堂脇に伏せたままになっていた。大正十二年の大震災の火災に遭ってボロボロとなる。さらに如電は、後年、単独で芳野の五十回忌の法要を営む。その一ケ月後の昭和六年一月十二日に如電は八十七歳で没する。（玉林晴朗「国学者榊原芳野の話」）今戸の安昌寺は昭和二十年三月、大空襲により焼け、現在の位置（今戸中学の北隣）に移った。（桑原伸介「榊原芳野のこと」）

明治十五年（一八八二）

十二月、芳野の遺志を受け大槻兄弟により、蔵書一四八七点、六一五七冊が東京図書館に寄贈の申出をされ、十六年三月十四日領収される。（桑原伸介「榊原芳野のこと」）依田学海の「那珂梧楼榊原芳野合伝」には「友人大槻修二文彦兄弟喪事を経紀して其蔵書を書籍館に納む。蓋し芳野の志なり。」とある。漢籍一三八点、明治以後の書籍五十三点、洋書四点。他は江戸期以前の和書で、国語国文三五〇点、歴史一五〇点、有職故実一〇〇点、地誌七〇点、医書・博物一五〇点。（当時の東京図書館の漢籍・和書の合計は五三一二点、二四六二七冊であったと言う。）寄贈された図書には「榊原家蔵」「故榊原芳野納本」の朱印がある。また『榊原家蔵書目』（国立国会図書館所蔵、大槻如電による写本。）によれば、蔵書の内容は、神典、歴史、雑史、法律、有職、字書（和字書）、語学書、日記、紀行、雑筆、物語、撰集、歌学、連歌、俳諧書、詩文、暦算天文、随筆、武家、医書、音楽、地理、書画、博物、支那書籍（経・史・子・集・字書・諸雑史子・小説伝奇）、叢書類、書目、釈典、遊戯、諸雑書、院本等に区別されており、芳野の博識ぶりがここからもうかがえる。

三、著作年表

1、明治4年　『語彙』文部省語彙局　小中村清矩、黒川眞頼らと編纂着手（～十七年）

2、同年　11月　『語彙活語指掌』『語彙別記』編輯寮

3、明治5年11月　「禍腐（こんにゃく）一覧」、「豆腐一覧」『教草』（明治七年九月　博覧会事務局発行）

4、同年　11月　『豆腐集説』片桐寅吉述、榊原芳野記

5、明治6年1月　『醤油集説』美濃判一巻　国会図書館写本所蔵

6、同年　『小学読本』五巻　榊原芳野編　文部省

7、明治7年2月　『女子修身道のしをり』浅岡一述、榊原芳野閲

8、同年　10月　『史略疑問釈文（小学必携）』榊原芳野著

9、同年　『小学読本』六巻　榊原芳野編　文部省

10、同年　『小学綴字書』榊原芳野編次、木村正辞・黒川眞頼同訂　文部省

11、同年　『西史初学び』巻之上　ルジュール著、山内惟一訳、榊原芳野校

12、明治8年1月　『小学綴字翼』榊原芳野著

13、同年2月　『太古史略』榊原芳野著

14、同年4月　「化石谷説」『洋々社談』第一号

15、同年6月　「水品略」『洋々社談』第三号

16、同年7月　「与外姪貞子書」『洋々社談』第四号

17、同年7月　『日本略史字引』榊原芳野著

18、同年9月　『蒔絵集説』美濃判一巻　国会図書館写本所蔵

19、同年11月　「海泥二鰍の談　擬欧州読本」『洋々社談』第八号

20、同年　『文芸概略』一巻　国会図書館写本所蔵

21、明治9年1月　「我国風人体の歌仮字の違ひしにあらず」『洋々社談』第十号

22、同年　4月　「植物史　木綿舶来」『洋々社談』第十四号

23、同年　4月　『改正小学読本字引』橘道守編、榊原芳野閲

24、同年　5月　「動物史中金魚」『洋々社談』第十五号
25、同年　5月　『詳註小学入門（教師必携）』榊原芳野編
26、同年　10月　『小学入門書取本』榊原芳野著
27、同年　10月　『小学読本字引（師範学校）』榊原芳野編
28、同年　『色図釈　甲』大槻文彦・榊原芳野述　文部省
29、同年　『植物綱目』長谷川泰原訳、榊原芳野刪訂『百科全書』（文部省　～明治十六年）
30、明治10年1月　『改正小学読本字引（東京師範学校）』稲垣千頴編、榊原芳野閲
31、同年　3月　「獅子舞説補考」『洋々社談』第二十七号
32、同年　3月　「植物史　櫟」『洋々社談』第二十八号
33、同年　8月　「阿波国徳島人富助に与へて砂糖製造を勧る書」『洋々社談』第三十二号
34、同年　8月　「文芸概略」国会図書館写本所蔵
35、同年　9月　『単語図書取指南』榊原芳野編
36、明治11年1月　『文芸類纂』八巻　榊原芳野編　文部省　西村茂樹序
37、明治12年1月　「夷三郎之説」『洋々社談』第五十号
38、同年　6月　「用の字の活」『洋々社談』第五十五号
39、同年　8月　「葵の弁」『洋々社談』第五十七号
40、同年　9月　『発明字学捷径教授法』松本新三郎著、榊原芳野校
41、明治12年　『古事類苑』編纂着手。小中村清矩、那珂通世、榊原芳野
42、同年　『新撰日本略史』巻一～四　榊原芳野編（～明治十三年）
43、明治13年4月　『染色史略』美濃版一巻　未刊行の写本　無窮会所蔵
44、？　『染色製造法』半紙判一巻（桑原伸介「榊原芳野のこと」より）
45、？　『髹譜』（玉林晴朗「国学者榊原芳野の話」より）

四、資料「家塾明細表」

以下は、従来の芳野の伝記研究では紹介された事がなく、また一般には参照しにくい文献と考えられるので、ここに原文のまま掲げる事とした。なお、伝記資料として重要な箇所は、すでに第二節の年譜の中に取り上げた。

明治三年　三月　攻玉塾開塾（明治六年開学明細調）

家塾明細表

第六大区八小区本所石原町八十一番地

東京府貫属士族吉田孝治叔父　塾主　榊原芳野　申四十歳

天保八九年、父正之助ヨリ教授相受。同十年己亥、旧津山医員井岡友仙ニ入学仕、同十四年癸卯、旧宇都宮藩士大橋順蔵ニ従学仕、其他神典并ニ物産学及葉学梵学等兼学仕。更ニ旧幕府儒員芳野無育ニ従学。文久年間、昌平坂学校教授之幕命ヲ受候処、数旬之後退辞仕候。明治二年己巳正月、依朝命、大学校教授試補被仰付、累遷、権

大助教編輯寮九等出仕博物局兼務ニ至リ、同壬申九月廃寮ニ依リ家居教授罷在候処、尤教授者来仕居候。於当所私塾開業候義者、明治三年庚午三月ヨリ開塾候也。

塾名　攻玉塾
位置　第六大区八小区本所石原町八十一番地受領
学科　皇学　律令学　支那学　物産学　音韻学
教授書籍概略　直ニ文部省学制ニ依リ候事
生徒人員　十歳以上十三歳迄　男三人　十四歳以上十九歳迄　同十一人
十九歳以上　同七十八人　総計九十二人

右之通相違無之候也

壬申十一月　榊原芳野　印

（『東京教育史資料体系　第一巻』東京都立教育研究所　昭和四十六年三月三十一日）

参考文献

榊原芳野「日本教育史略」（明治10年8月）吉野作造編『明治文化全集第10巻　教育篇』日本評論社　昭和3年3月15日
依田学海「那珂通高榊原芳野合伝」『譚海』巻四　鳳文館　明治17年
関根只誠編『名人忌辰録』（明治27年4月序）ゆまに書房　昭和52年11月21日
西村茂樹『往事録』西村家図書部　明治38年7月19日
「古事類苑編纂事歴」『古事類苑　総目録索引　60』（大正3年8月29日）古事類苑刊行会　昭和11年4月25日
大槻如電筆写『榊原家蔵書目』国立国会図書館所蔵（大正4年6月17日購求とあり。）　大正15年5月1日
逸見仲三郎編『慶長以来国学者史伝』青山堂書房　昭和54年10月20日
大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成』（昭和9年6月30日）日本図書センター　昭和54年10月20日
大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成　続編』（昭和9年6月30日）日本図書センター　昭和54年10月20日
小川貫道『漢学者伝記及著述集覧』（昭和10年4月）名著刊行会　昭和45年2月16日
玉林晴朗「榊原芳野と其の墓」『掃苔』618　昭和12年8月
玉林晴朗「国学者榊原芳野の話」『伝記聚芳』日本青年教育会出版部　昭和17年3月5日
古田東朔「田中義廉一～三」『実践国語』穂波出版　昭和30年7～9月
大槻文彦『新訂大言海』富山房　昭和31年3月1日
昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第2巻　昭和31年4月5日
昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第13巻　昭和34年7月25日
東京都立教育研究所『東京教育史資料大系　第一巻』　昭和46年3月31日
法政大学文学部史学研究室『日本人物文献目録』平凡社　昭和49年6月10日
田口卯吉他『大日本人名辞書』講談社　昭和49年8月28日

桑原伸介「榊原芳野のこと」『図書館と出版文化―弥吉光長先生喜寿記念論文集』弥吉光長先生喜寿記念会　昭和52年9月9日
日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館　昭和56年9月10日
国立国会図書館編『国立国会図書館所蔵個人文庫展　その2―古典籍探究の軌跡―』展示目録　昭和58年10月1日
児玉幸多他監修『日本史総覧　補巻Ⅲ』新人物往来社　昭和61年8月5日
国学院大学日本文化研究所『和学者総覧』汲古書院　平成2年3月20日